

名古屋大学

NUA
archives
university
nagoya

大学文書資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第24号 2008. 3

目次
Contents

- 大学アーカイブズの試み（大学文書資料室 室員 山口拓史） ————— 2
- 文書管理とアーカイブズ（大学文書資料室 室員 堀田慎一郎） ———— 3
- 資料室だより
- 名高商卒業生西川昌雄氏旧蔵資料を受贈しました ————— 4
- 資料室日誌（抄） ————— 5
- 豊田講堂改修竣工式で企画展「豊田講堂のあゆみ」をおこないました— 6



豊田佐吉翁肖像画

豊田佐吉翁肖像画（名古屋大学所蔵、本号6頁を参照）

大学アーカイブズの試み

—名古屋大学の事例から—

大学文書資料室 室員 山口 拓史

名古屋大学における「公文書館」的な機能と「歴史資料館」的な機能をあわせもつ組織として、旧大学史資料室を改組する形で大学文書資料室（以下、NUA）が設置されたのは2004年度のことでした。NUAの設置は、国内の大学アーカイブズ組織約80校で組織されている全国大学史資料協議会の2004年度全国研究会においても取り上げられ、国立大学系の大学アーカイブズの一事例として注目されています。

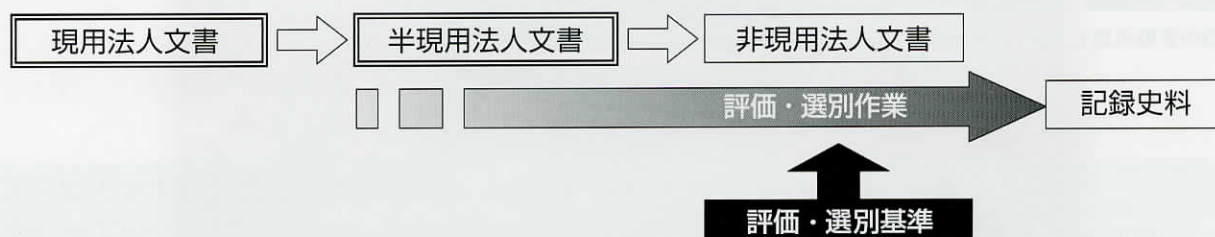
NUAが国立系大学アーカイブズの中で注目を集めた理由は、大学アーカイブズの機能についての斬新的な考え方にあります。それを一言で表現するならば、大学アーカイブズに法人文書（以下、文書）の管理を支援する機能をもたせるということになります。ここでの「法人文書管理」とは、大学の本部事務局や各局部事務部（以下、事務組織）が行う文書（「現用法人文書」と「半現用法人文書」）の管理業務を意味します。この文書管理は、文書の発生や収受を起点に始まり、それら文書が業務上利用されて本来の役割を終えるまでの過程が中心となります。

通常、大学アーカイブズという組織は、事務組織による文書管理の対象外となった（＝業務上利用されなくなった）文書（「非現用法人文書」）を対象として主に歴史的価値の観点から評価・選別を行って歴史的資料（「記録史料」）の保存・管理を行います。この場合、大学アーカイブズが事務組織の文書管理に関与することはなく、事務組織による文書管理と大学アーカイブ

ズによる記録史料管理は各組織において個別に行われることとなります。

これに対してNUAの特徴は、事務組織による文書管理をアーカイブズ学の視点から支援することによって、事務組織の文書管理と大学アーカイブズの記録史料管理の連携を図ろうとする点にあります。具体的には、日常的に業務利用される「現用」段階が過ぎ、業務利用の頻度は低いが所定の保存期間が満了していない「半現用」段階の文書に対するケアや予備的な評価・選別作業をNUAが行うことなどが挙げられます。その際、NUAが事務組織にかかわって文書の管理業務を行うわけではないことに留意する必要があります。文書が本来の意味で業務に利用されるためには、事務組織による適正な文書管理が必要であることはいまでもありません。

文書館学の分野では、文書の発生・収受から業務利用を経て最終処置（保存あるいは廃棄）されるまでの全期間を意味する「ライフサイクル」という用語があります。NUAによる文書管理支援は、ライフサイクル全体におよぶ文書の管理体制を構築する取り組みの中で構想されています。それは、本学あるいは地域社会にとって価値ある記録史料を確実かつ着実に保存するため、さらには「半現用法人文書」の管理に関する事務組織の業務負担を軽減するためにも有効な手段であり、大学の社会的責任（USR）活動にもつながるものであると考えられます。



文書管理とアーカイブズ

—朝日新聞の記事を読んで—

大学文書資料室 室員 堀田 慎一郎

今年の2月5日、朝日新聞の朝刊に、「公文書保存 やっと本腰 管理強化へ議員立法の動き」と題する記事が掲載されました。第3面の半分を使い、社説の横でかなり大きく扱われています。

この記事によりますと、福田康夫首相の強い意向をうけて、省庁の文書管理の改善に政府がやっと本腰を入れはじめ、与党内に文書管理法（仮称）の制定を求める動きもあるとされています。

昨年、社会保険庁における年金記録のずさんな管理によって、日本中を揺るがす大騒動がおこったことは記憶に新しいところです。そのほかにも、薬害肝炎問題に際しての厚労省からの患者情報ファイルの「発見」や、インド洋で活動する自衛艦の航泊日誌破棄問題など、今まさに日本の公文書管理のあり方が問われています。

そこで問題となるのが、保存期間が満了した国の行政文書（非現用文書）の取り扱いです。非現用文書は、歴史的資料として重要であると判断されれば国立公文書館に移管されることになっています。しかしその判断は各省庁で独自におこなわれ、公文書館にはきわめて限られた文書しか移管されていないのが現状で、かなりの重要文書が廃棄されてしまうことが危惧されています。国立公文書館が2001（平成13）年に内閣府の機関から独立行政法人となったことも、その権限の低下をまねき、事態に拍車をかけているようです。

諸外国では、国の行政文書の移管や廃棄に関する権限は国立公文書館にあることが一般的であり、非現用文書の評価選別を視野に入れて、公文書館が文書管理のあり方にも深く関与しています。また、国立公文書館の規模も、たとえば職員の数でいえば、日本はアメリカの60分の1にすぎず、そのほかの主要国の10から10数分の1、おとなりの韓国と比較しても7分の1というのが現状です。

文書館（アーカイブズ）は、単に研究者のために歴史資料を保存しておく機関ではありません。近代的な文書館が整備されはじめたのが、フランス革命をきっかけにしているように、民主主義制度を担保するきわめて重要な役割を担うものです。最近では、「知る権利」という概念を用いて、その機能を説明する場合も多く

なっています。

福田首相は、昨年12月の参議院で、民主主義は国民一人一人が正確な判断をするということであるからには、事実が正確でなければならず、記録や事実をどうやって公開し、残していくかということも、国の基本的な仕事ではないかと思う、と答弁しています。

もちろん、当分公開できない文書があるのはやむをえませんが、ただ、どういった文書を公開するかを秘密裡に決めるのではなく、公開を原則としつつ、どういった文書を非公開とすべきかを国民の合意のうえにおいて明らかにしておくべきでしょう。

制定が検討されている文書管理法（仮称）は、こうした個別分散的な文書管理をあらため、文書の作成から移管・廃棄までの一貫した体制を定めて、さらには歴史的な文書の公開・利用をうながすためのものです。

国に限らず、組織体の業務を担う人間は常に入れ替わるのが普通です。また、人間は基本的に忘れる動物であり、たとえばはっきり残っているように思える記憶でも、さまざまな要因によって、無意識のうちに追加・修正・欠落がなされたうえで固定化したものです。その意味で、文書による一次記録は、ほかに替えることのできないものなのです。

名古屋大学では、保存期間の満了した事務文書（法人文書）は大学文書資料室に移管され、各部局が独自の判断で廃棄してはならないことになっています。大学文書資料室では、文書が作成される段階にまで視野を広げつつ、歴史的な文書の評価選別や保存のあり方について検討してきましたが（前頁参照）、いまだ全学的な合意を得るまでには至っていません。

国立大学法人である名古屋大学の法人文書も、国の行政文書に準ずるものとして、十分な管理が必要であるのは当然のことです。その一方で、国立大学法人が国そのものではないことも確かであり、名古屋大学の法人文書に歴史的資料として後世に残すだけの価値があるのかどうかといった根本的な問題も、広く議論される必要があるでしょう。これは、名古屋大学を世界や日本、地域の中にどのように位置づけるのかという、大学の自己認識や基本方針にもかかわる問題だと思えます。

資料室だより

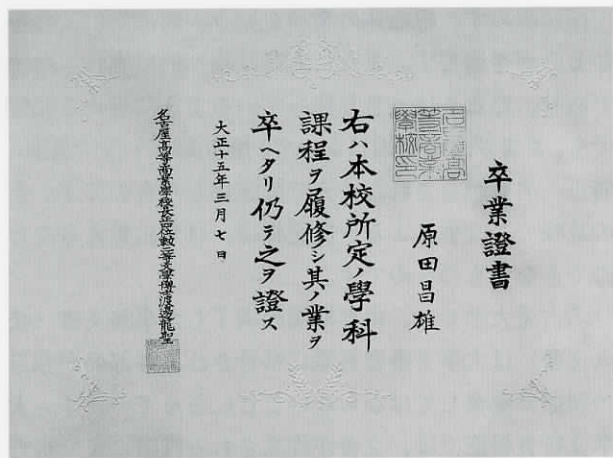
○名高商卒業生西川昌雄氏旧蔵資料を受贈しました

このたび大学文書資料室では、山本幸江氏より、名古屋高等商業学校（名高商、名古屋大学経済学部の前身）卒業生西川昌雄氏旧蔵の資料を受贈しました。

西川昌雄氏（1905-1986）は、1926（大正15）年に名古屋高等商業学校を卒業しました。さらに東京商科大学（現在の一橋大学）に進学し、銀行勤務をへて豊田産業（現在の豊田通商）に入社、常務取締役を務めたのち、名古屋ゴム（現在の豊田合成）に転じ、1966年には取締役社長に就任しています。

昌雄氏の養父である西川秋次（1881-1963）は、トヨタ自動車の創始者で発明王としても著名な豊田佐吉に見出され、会社経営や工場管理などの面で佐吉を支えた人物です。1961年に秋次が設立し、昌雄氏が第2代理事長となった財団法人西秋奨学会は、これまで名古屋大学をはじめとする多くの学生を支援してきました。2004（平成16）年には、佐吉の孫にあたる豊田信吉郎氏（故人）夫人江美氏からの資金が提供され、財団法人豊秋奨学会として現在に至っています。寄贈者の山本幸江氏は、昌雄氏の長女にあたられます。

このように名古屋大学と縁の深い人物の旧蔵資料が、おりしも豊田佐吉を記念して建設された豊田講堂の改修成った同じ年に寄贈されたことは、とても感慨深いものがあります。もちろん、昌雄氏が名高商などで使っていた経済学関係の文献を中心とする今回の100点余の寄贈資料は、名古屋大学の歴史を語る貴重な史料となることでしょう。



西川（旧姓原田）昌雄氏の
名高商卒業証書（寄贈資料より）



名高商寄宿寮第三期寮生記念写真（1923年10月撮影、寄贈資料より）

資料室日誌（抄）

- 8月3日 山口拓史室員がキャンパスミュージアム小委員会及び全学展示スペース検討WG合同会議に出席。
- 8月20日 愛知医学校建碑WGを開催（於資料室）。
- 8月24日 テニス部OBから資料を寄贈。
- 8月25日 山口室員と堀田室員が取材のため東海学会寮歌祭に出席（於名古屋国際ホテル）。
- 8月28日 大学院経済学研究科から非現用文書を搬入。
- 8月29日 中部電力と東桜会館での展示について会談。
- 9月7日 山口室員と堀田室員が科研費研究会に共同研究者として出席（於小樽商科大学、北海道大学、～8日）。
- 9月10日 愛知医学校建碑WGを開催（於資料室）。
- 9月11日 羽賀祥二室長が佐分晴夫理事と会談。
- 9月13日 山口拓史室員がキャンパスミュージアム小委員会及び全学展示スペース検討WG合同会議に出席。
- 9月19日 名古屋テレビニュース情報センターへ豊田講堂関係の資料を提供。
- 9月25日 羽賀室長、山口室員、堀田室員が高橋誠理事と会談。
- 10月1日 全学教養科目「情報公開と文書資料—文書の世界を歩く—」の講義開始。
- 10月9日 羽賀室長、山口室員、堀田室員、武藤英幸専門職員が愛知医学校・愛知病院記念碑完成記念式典に出席。
- 10月10日 羽賀室長が博物館特別講演会「愛知における西洋医学のあけぼの～愛知医学校・愛知病院新築移転130周年記念碑完成によせて～」で講演。
- 10月18日 博物館より大道寺家文書を搬入（博物館改修工事のため一時預かり）。
- 10月24日 日本糖尿病学会50周年記念誌編集部へ勝沼精蔵第3代総長の資料を提供。
- 11月2日 総務課より資料移管。
- 11月7日 山口拓史室員がキャンパスミュージアム小委員会及び全学展示スペース検討WG合同会議に出席。
- 11月13日 大学文書資料室運営委員会（第13回）を開催。
- 11月20日 凸版印刷が来室し、検索システムについて打ち合わせ。
- 11月21日 山口室員がキャンパスミュージアム小委員会及び全学展示スペース検討WG合同会議サブワーキング（12/4、1/11も同じ）に出席。
- 11月22日 佐分理事、高橋理事が来室し、全学的運用定員の見直しについて会談。
- 11月26日 名大医学部OBが資料提供について協議のため来室。
- 11月29日 岩手放送制作部より3名が、後藤新平に関する番組の取材のため来室。
- 11月30日 『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第23号を刊行。
- 12月5日 塩野谷恵彦名誉教授より愛知医学校・愛知病院記念碑の工事記録写真を受贈。
- 12月13日 堀田室員がキャンパスミュージアム小委員会及び全学展示スペース検討WG合同会議に代理出席。
- 12月19日 中部経済新聞社より2名が取材のため来室。
- 12月21日 総務部総務課より資料移管。
- 12月27日 花組社へ渋沢元治関係資料を提供。
- 1月10日 名古屋大学交響楽団から2名が来室し、資料の寄託について打ち合わせ。
山口拓史室員がキャンパスミュージアム小委員会及び全学展示スペース検討WG合同会議に出席。
- 1月22日 中日新聞社会部に豊田講堂関係の資料を提供。
- 1月23日 堀田室員が全学計画・評価担当者会議に出席。
パートタイム勤務職員の公募要項を名古屋大学HPに告示。
秘書課とホームカミングデイについて打ち合わせ。
- 1月24日 内閣府による歴史的な文書資料に関する調査のため、新情報センターから1名が来室。
- 1月29日 大学文書資料室運営委員会（第14回）開催し、次期室長候補者に羽賀室長を選出。
各部局に平成18年度の校費による印刷物の提供依頼文書を発送。

○豊田講堂改修竣工式で

企画展「豊田講堂のあゆみ」をおこないました

大学文書資料室は、今年2月2日(土)の豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイにおいて、「豊田講堂のあゆみ」をテーマとする展示をおこないました。

資料室では、豊田講堂改修工事直前のホームカミングデイでも、この企画展示をおこないましたが、これが大変好評を博したことをうけて、今回のアンコール展示となりました。その内容は、豊田講堂があゆんできた1960（昭和35）年の建設以来の歴史を、模型やパネル、ポスター、物品展示、DVD短編ムービーなどで分かりやすくまとめたものですが、今回新しく展示に加わったのが、豊田佐吉の肖像画です（表紙の写真）。

豊田講堂は、トヨタ自動車工業（現在のトヨタ自動車）から建設寄付されたものですが、その名称は同社の創始者である発明王豊田^{とよだ}佐吉を記念したものです。この肖像画は、その裏書きから、豊田講堂の建設工事がはじまってまもなくの1959年5月に、豊田自動織機製作所（現在の豊田自動織機）から名古屋大学に寄贈されたものであることは判明していますが、作者や寄贈された経緯などについてはいっさい分かりません。今回の展示は、60年にわたって豊田講堂で保管されてきたこの肖像画をぜひ展示するようにとの、平野眞一総長の指示をうけてのもので

す。また、展示会場には名大史ブックレットシリーズの各巻を置き、来観者のご自由にお取りいただくようにしたところ、1,600冊以上が飛ぶようになりました。名古屋大学の歴史への市民の強い関心をあらためてうかがうことができます。



観覧者でにぎわう展示会場（豊田講堂）



展示会場にて説明をうける榎文彦氏（写真中央）。榎氏は豊田講堂の設計者であり、今回の改修においても設計を担当した。

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第24号
Nagoya University Archives News No. 24

名古屋大学大学文書資料室

室長 羽賀 祥二（教授・併任）
専任室員 山口 拓史
堀田 慎一郎
専門職員 武藤 英幸
主任 奥谷 明稔
事務員 増田 よしみ

発行日 2008年3月30日（年2回刊）

編集
発行

名古屋大学大学文書資料室

名古屋市千種区不老町〒464-8601

電話：(052) 789-2046

FAX：(052) 788-6222

E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp

印刷

株式会社荒川印刷

名古屋市中区千代田2-16-38